

BOOK
REVIEW戦後80年①
子どもたちに読み聞かせよう

『戦争童話集 完全版』

野坂昭如 著

戦後80年という節目の年。それをどのように噛みしめるのか。戦中の体験や記憶をもつ人たちがいよいよ少なくなっている。われわれは今それをいかに受け止め、いかなる意味を見出し、いかに意義づけることができるのか。これから何回か、それをテーマに適当な本を選び、評してみたい。

最初を選んだのが、刊行されたばかりの野坂昭如著『戦争童話集 完全版』である。全部で14編。中公文庫版『戦争童話集』(改訂12刷、2020年7月)を底本として、沖繩編が2編加えられ、完全版と銘打たれている。12a 27p/明朝 W2

著者の作品では、戦火のもと、二人きりの兄妹は必死に生きようとするが、ついに妹を栄養失調で失う悲劇を描いた小説『火垂るの墓』がことさらに有名だが、そこで描かれた戦争の不条理とその中で愛情と無情の交錯が、本書でも全編で貫かれている。

ばくが著者の戦争童話集に接するようになったきっかけは、何年前か定かでないが『干からびた象と象使いの話』をラジオ朗読で聞いたことである。日本全土に空襲が及ぶようになり、猛獣処分という軍部からのお達しで動物園から動物の姿が消えた頃、象使いはその命に服さず愛おしい象を引き連れて山の奥へ奥へと逃亡する。最初は何とか食いつないでいたが、次第に象使いも象もやせ衰えてしまう。それでも象は力を振りしぼり、瀕死の象使いのために食べ物運んだり、彼から教わった芸を見せたりしながら、力づけようとする。象使いはその甲斐もなく亡くなり、自身の間もない死もはつきりとした象は、「紙のように軽い」象使いを背中に乗せ、どこかへ消えていく。

本書で思いを新たに象使いの象に対する献身的なふるまい、そして象の象使いに対するけなげなふるまい。戦中という緊迫したときにあつて、二人を深く結びつける深い愛情や思いやりが何とも切なく愛おしい。飾り気のない平易な文体で描写されるのだが、童話という形式がそうさせるか、一つひとつのシーンがまるで紙芝居で見ているように、絵画的に迫ってくる。『青いオウムと痩せた男の子の話』『年寄った雄狼と女の子の話』『馬と兵士』は、『干からびた象と象使いの話』と同様に、動物と人との間で言葉を越えて心を通わせる物語と言ってい。着想の妙に感心したのは、『小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話』。社会の片隅に追いやられたように生きるクジラの盲目的な愛。クジラと潜水艦を組み合わせたとは誰が発想できようか。いまわのきわに思い浮かべるのはやはり母親なのか。『嵐になったお母さん』『赤とんぼと、あぶら虫』『ソルジャー・ファミリー』の最後のシーンは、母親のもとに帰ろうとする子どもたちの意志が描かれている。とりわけ、おそらく戦争童話集の中でも一番知られた作品の一つに違いない、『嵐になったお母さん』は、

業火に包まれた母が子どもだけでも助けようと必死にもがく姿が描かれている。母性や慈愛の本質を、そこそ肉体から絞り出すように描かれている。

著者は文庫「改版のあとがき」(2002年9月)で、扱えなかったことの一つに「沖繩」を挙げていた。「何も浮かばなかった。ただ空白」と嘆いた時期を経て『ウミガメと少年』『石のラジオ』が書かれた。両篇ともに沖繩戦を舞台にしている。沖繩民謡、三線、ガマ、亀甲墓、さとうきび畑など、沖繩のイメージの定番なのだが、本筋は戦争で家族を失い、ひとり残された少年たちである。随所に織り込まれた沖繩の美しい海と好対照の少年たちの死が深い悲しみを誘う。

昭和20年、8月15日。作品はすべてこの書き出しから始まる。その日を境に、日本は平和の道を希求するようになる。映画監督の故郷田正浩は「日本の戦後は痛切な悲劇だと思っていたら、グレン・ミラー楽団の『イン・ザ・ムード』が始まりました」と語った(朝日新聞「エンドロール」)。戦後に生をまっとうする人には誰にも共通する体験であろう。だが、戦争童話集の作品の主人公らは、それを知ることなくはかなく命を散らしてしまう。精一杯に生きようと努めながら、それをあざ笑うかのようにいとも簡単に裏切られる。それだけに戦争の不条理がいっそう色濃く映し出される。

著者は、子どもたちの柔軟な感性により響くようにと、童話という形式を選んだに違いない。大人の責任として子どもたちに読み聞かせよう。生きとし生けるものの細やかな愛情と戦争の残酷さがきつとジーンと心に染み入っていくだろう。

関本 英太郎

12a 27p/明朝 W2
19a 18p/18w 註
19a 18p/18w 註

ただ柱を互い違いに並べただけではない

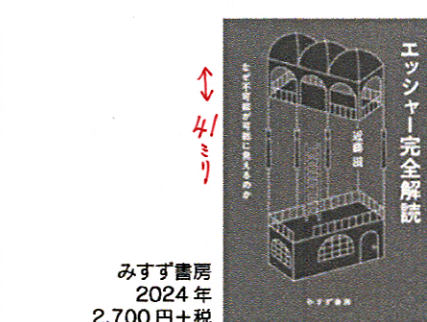
『エッシャー完全解説—なぜ不可能が見えるのか』

近藤 滋 著

表紙に描かれたイラストの原画『物見の塔』は、誰もが見たことがあるだろう。パッと見には普通の建物で違和感はないのだが、よく見ると下階と上階がねじれており、現実にはあり得ない建物が描かれている。ぐるぐると永遠に水が流れ落ち続ける『滝』や、ロの字の階段をいつまでも昇り続けて降り続ける『上昇と下降』も有名である。オランダの画家エッシャーは、三次元の立体空間に存在する物体を二次元平面に閉じ込めるときに、ひとひねりして不思議な絵を作り出した。ほとんどの作品が白黒なのは、版画だからである。だまし絵も面白いが、その数学的に厳密に計算された精緻な作品に圧倒される。今ならコンピュータグラフィックスで自由自在に描ける線を、エッシャーは定規とコンパスだけで正確に描いた。

普通はこの絵を見て「ねじれてるみたいに見えるんは、この柱が互い違いになってるからや」と気づいて「うまいこと描いてあるわ」だけで終わる。ところが、である。実は、そんな簡単な話ではないことに気づいた著者が、その隠された仕掛けを解き明かしていくのが、本書である。実に面白い。

建物が主役の絵なので、そばに描かれた人物などいっそいなくても、不思議な建物の絵は成立する。しかし、完全主義者で緻密な性格のエッシャーがそんな無駄な脇役を置くわけがないと踏んだ著者は、その人物の存在理由を探す。この謎解きの課程が、読者の興奮を誘う。数学的な話があっても数式は出てこない。豊富なイラストやレゴで作った模型が、理解を助けてくれる。だまし絵は錯視が元なのだが、ボツンと描くと不自然さが残

みすず書房
2024年
2,700円+税

る。その不自然さをごまかすために、何気なくそこにいるように見える人物が一人の人物の謎が解けると、また次の人物がなぜそこにいるのかを知りたくなる。人物だけでなく、併設された家屋や高くそびえる塔も、実は自然さを醸し出すために仕掛けられた小道具だというのだ。この作業は、エッシャーが絵を描くときに試行錯誤した過程を解きほぐすことであり、エッシャーの思いや願いを、謎をととして知ることになる。エッシャーは生涯をととしてこれらの手の内を明かしておらず、ただ「素晴らしい庭園をたった一人で歩いている」と暗示的な言葉を残している。つまり、仕掛けがいっぱいの庭園の存在に気づく者はいなかったのだ。エッシャーの顔写真などはどれも表情が固いのだが、60年以上たった遠い日本でもようやく謎が解かれ、ニンマリと笑っているだろう。いや、エッシャーのことだから「なんでそないに時間かかったんや」と不貞腐れているかもしれない。

『物見の塔』で謎解きの快感を覚えた著者は、次々と別の作品の謎を解いていく。著者は画家ではなく、美術関係者でもない。生物学者である。研究者らしく、絵に隠された謎を科学的手法で解き明か

している。推測でしかない場合は推測であると断り、根拠がないことは決めつけない姿勢にも好感が持てる。書評子が抱いた疑問「ほんまに今まで解き明かされてへんかったん？」については著者も気にしており、あとがきで見解を述べていた。なるほど、納得である。

高校生のときに、エッシャー展を訪れた。そこで、展示作を収録した通常の図録だけでなく、残された素描や習作や製作過程を記した付録まで買った。よくまあこんな面白い付録まで製作したものだと思心するし、当時の自分もよくこんなものを買ったものである。どれも何度も見たいので、手垢で汚れている。数年前に学会でオランダのハーグを訪れた際には、市内にあるエッシャー美術館にも立ち寄った。建物丸ごと上から下まで全部エッシャーの作品で、時間をかけて楽しんだ。日本のエッシャー展はいつも人気でごった返すが、本国では絵の前でじっとながめていられた。そんなエッシャー好きの書評子も、本書で明かされた仕掛けにはまったく気づいていなかった。こういうのを目から鱗が落ちるといふだろう。もちろん本書は、エッシャー好きでなくとも楽しめるに違いない。

本書は日本語で書かれているが、エッシャーの母国のオランダ語訳や、人口の多い英訳はしないのだろうか。日本語よりもはるかに反響はあるだろうし、売れると思うのだが。オランダ人は「そんな日本のやつらに何がわかるか」などと、ひねくれたりはしないだろう。

水谷 光 著
(市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)
12a 27p/明朝 W2
19a 18p/18w 註

BOOK REVIEW

引用

Some must watch while some must sleep (Hamlet, Act3, Scene2)

80% + 20%

22% 見込み MB 31
シリロエ

『睡眠の起源』

金谷 啓之 著

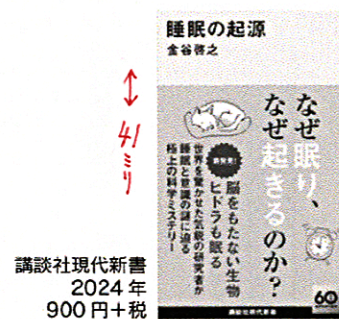
160分

素晴らしい著作である。まだお読みでない方々には一読をお薦めする。著者はまだ20代の大学院生であるが、すでに「脳をもたないヒドラ（注：小型の腔腸類でクラゲ、イソギンチャクの同類）も眠る」ことを発見した研究者である。より正確に言うなら、「反応性の低下を伴った可逆的な行動静止の状態」を制御する遺伝子がヒドラにも複数存在し、その一部はヒトと共通している、ということである。

この文章だけでは即時には理解しがたかもしれないが、そうした最先端の研究の内容を一般人でも理解しやすい文章にできる能力が素晴らしいのだ。「これ知るを知るとし、知らざるを知らずと為す、これ知るなり」という言葉が論語にあるが、巷にあふれる嘘ハッタリ・誇張・詭弁まみれの文章とは一線を画して、わかっていることとわかっていないことの弁別が学術論文のように明快であり、その一方で（一部の）学術論文のような学術的な表現は避けられている。表現が明快で一文一文が短くリズム感がよい。

なお付け加えるならば、ショウジョウバエやマウスでは脳“以外”の組織にも睡眠を調節する仕組みのあることが、著者の論文と前後して報告されているのだそうだ。驚いた。

内容は大きく分けて、①自分の過去の研究の振り返り、②睡眠研究の歴史、③将来の研究の展望、である。①ではアゲハチョウの観察に熱中していた小学中学時代の話と、良い指導者に恵まれた高校大学の話が出てくる。ヒドラの研究は九州大学理学部の生物学教授の研究対象だったという偶然によるものだが、著者は大学入学直後から「本当に一年生？」と言われながら、研究室に通って研究していたという。著者は（謙虚にも）はつき



り記載していないが、ヒドラの睡眠に関する論文で Science Advances に掲載されたものは、まだ学部学生のとときの仕事である。素直に感動したい。

②にはアリストテレスに始まるあれこれの話が出てくる。書評子が個人的に面白いと思ったのは、生物は「睡眠」状態が本来の姿であって進化の過程のどこかで「覚醒」という能力を獲得したのではないかという仮説があること、マウスに断眠状態を強いるとサイトカインストームが起きるとのこと、漁師がクラゲは昼寝をすると言ったこと、である。

③に関しては、東京大学大学院医学系研究科の薬理学講座に籍を移して、「意識」の問題に取り組んでいるようだ。そして全身麻酔も関心の対象となっている。吸入麻酔薬は作用部位も作用機序も特定されていないけれど誰にでも効く、というのは麻酔科医に限らず医師の常識だろう。ただ書評子としては、誰にでも効くことよりも「誰もが（麻酔を切れば）覚醒する」ということのほうが重要なのではないかと、考える。現在地球上には80億人のヒトが生きている。オカルト的な話になるが、麻酔ガスが不可逆的に作用するという80億分の1の特異体質のヒトがいて、それが明日の自分が担当する患者であるかもしれない。その場合、

手術は無事に終わったが麻酔から覚めない、ということが起こり得る。当然ながら麻酔事故、担当医のミスだと疑われ、いくらミスなどしていないと主張しても原因不明のまま断罪されることにもなりかねない。ロビン・クックのミステリー「コーマ」の冒頭はそうした麻酔科医の恐怖から始まっている（原因は後々解明される）。

著者も、麻酔の導入と覚醒は非対称だと気づいている。つまり麻酔から覚醒するときの神経活動の変化は導入時の逆再生ではない、ということだ。そのため、麻酔からの回復過程は（生物進化上の）「意識」の発生を（記録テープの早回しみたいに）観察する良い手段だと主張する研究者もいるらしい。一つの事実として、オレキシンを欠損させると覚醒が遅れるという。オレキシンは覚醒維持そのほか複数の作用をもつ神経ペプチドであるが、麻酔からの意識の回復、つまり覚醒の獲得にもかかわっているということだろうか。だとしたら、それは「意識」の成立にも関係するのかもしれない。

不眠不休で働くことが熱意の表れであると美談にされた時代がある。「24時間働けますか、ジャパニーズビジネスマン」と栄養ドリンク剤のCMで煽られた時代がある。一方で十分眠れていないと訴える不安恐怖症も世の中には存在する。いずれにせよ、睡眠が生物にとって欠くことのできない生理現象であることは間違いない。「寝る子は育つ」とは古い諺であるが、実のところ、いい年をした大人も寝ることで、身心のいずれかあるいは両方が育っているかもしれないのだ。

アキ

福家 伸夫

（帝京大学ちば総合医療センター）